

夏秋なす 育苗後半から定植までの管理

令和4(2022)年5月
芳賀農業振興事務所

<栽培管理の注意点>

- 定植準備は、遅れないようすすめる。
(マルチ下20cmで、地温15°C度以上確保)
- ハウス・トンネル内の高温に注意する。
- 育苗期は、急な夜温低下に注意する。
- 定植前に、育苗床で病虫害防除を実施する。

1. 育苗後半の管理：定植ほ場の環境に徐々に近づける

(1) 温度管理

- なす苗の生育に合わせて、徐々に昼温・夜温、地温を下げ、しまった苗に仕上げ。また、苗には、光がよく当たるよう管理する。(軟弱徒長させない)
- 午前中の温度管理から、午後は、目安温度から夜温へと徐々に下がるよう管理し、急激な温度変化を避ける。
- 定植予定の10日前くらいからは、昼温20°C前後、夜温13°C程度で管理し徐々に低温(ほ場環境)に慣らす。

(2) かん水管理

- ポットごとに株の生育状態や乾きぐあいを見て、**1鉢ごと少量づつ**行う。
- 極端な多湿、乾燥は根の生育を抑制するため注意し、朝のかん水時に湿ってる鉢へのかん水は控える。
- 葉上からのかん水は行わず、**鉢土にかん水**する。
- 定植10日前頃からはかん水量を徐々に減らす。

(3) 鉢のずらし

- 葉と葉が重なり合わないよう、早め早めにポットのずらしを行う。
- 育苗床の中央部は苗が徒長しやすいため、中央部と床端の苗を入れ替える。

(4) 追肥

- 定植が近づいてからの追肥は、葉面散布で対応する。(必要に応じて、液肥利用)
- 鉢土が過湿や過乾燥の場合、根が傷んだ場合などでも、葉が黄化してくるので、育苗床の下部などの状態を再確認する。
- ※生育遅れが心配でも、一度に多量の肥料や有機物を施用しない。(ガス害注意)

(5) 育苗後半～定植期前後の病害虫防除

- 苗からほ場への持ち込みを防ぐため、定植前の病害虫防除を徹底する
- 特に定植後の害虫発生を防ぐため、定植前に苗へのかん注処理、又は、定植時に粒剤を施用する。

2. 定植準備

(1) 基肥の施用【施肥基準(栃木県農作物施肥基準 H29年3月版)】

目標収量 (kg/10a)	pH		施肥量(kg/10アール)		
			窒素	リン酸	加里
5,000～ 8,000	6.0～	基肥	15	20	15
	6.5	追肥(3回)	5×3		5×3
		成分合計	30	20	20

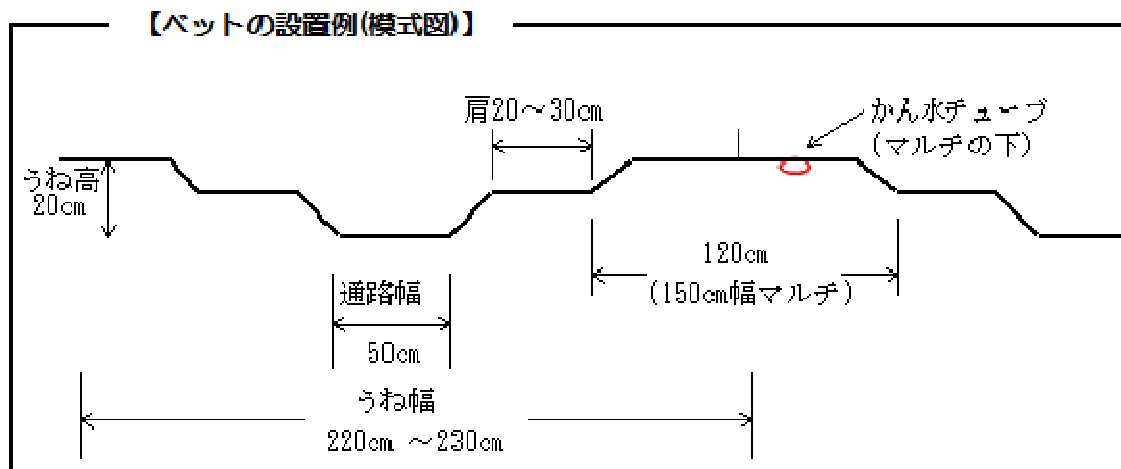
(2) ベッド及びトンネルの設置

◆定植予定日の2週間前までには完了させる。

マルチ下15～20cmで、地温15℃以上を確保する。

①栽植距離とベッドの作り方

栽植距離：うね幅 220～230 cm × 株間 60～75 cm



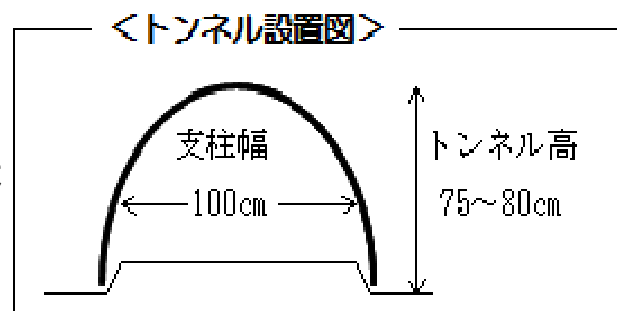
○水田や水はけの悪いほ場は、ベッドをやや高めにする。

○かん水チューブを設置する場合は、株から20～30 cm離して設置する。

②トンネルの設置

○トンネルは、

支柱長が270 cmの場合、支柱幅は100cm、高さは75～80 cmが目安



(3) 排水溝及び防風ネットの設置

① 排水対策

○ほ場内に雨水が停滞しないよう排水溝等を設置する。

② 防風ネット等の設置

○風によるスレ果、枝折れ防止のため、ほ場周辺には必ず防風ネット又はソルゴー（播種量：2kg/10a）を設置する。

3. 定植時期及び定植苗の適期

(1) 定植時期と保温資材

○生育適温：22～30℃（17℃以下では生育が停滞する。）

○霜には非常に弱く、-1～-2℃で凍死する。

※霜が降りると、べたがけ資材だけでは障害が発生する。

○35～40℃になると花器に障害が発生し、奇形果の原因となる。

定植時期	保温対策
～ 4月上旬	小トンネル（ビニール）二重 + べたがけ資材（不織布等）
4月上旬～4月下旬	小トンネル（ビニール） + べたがけ資材（不織布等）
4月下旬～5月上旬	小トンネル 又は べたがけ資材（不織布等）
5月中旬以降	なし

※気象条件や地域の気温状況に応じて、調整する。

(2) 台木別の違いによる定植時期の目安

◆定植時期は、台木品種の特性に合わせる事が基本となるが、定植時期が早くなるほど、気温が低いので、やや若苗で定植し、草勢を低下させないことも重要。

台木		定植時期
品種名	草勢	
トルバム、トナシム	草勢強い	開花前（花卉が見え始める）
赤なす、台太郎、耐病VF	標準	若苗（開花7日前程度）
カレヘン	草勢弱い	蕾が見えた苗

4. 定植時の留意事項

○定植当日は、ポットへ十分かん水し発根を促す。

○定植は、風のない晴天日に行い、作業は午後3時頃までに終了する。

- 定植は深植えにしない。（菌核病や褐色腐敗病が株元で発生しやすくなる。）
また、接木苗は、**接木部が土中に埋もれないように注意する。**



※接木部が土に埋まってしまうと、接ぎ木部から根が出てしまい、接木の効果が無くなるため注意する。

接木部

- 定植後には、株元にかん水する。
- 害虫防除のため、定植前に苗へのかん注処理、又は、定植時に粒剤を施用する。
- 風等に揺られて苗が倒伏すると生育が遅れるため、定植時に仮支柱を設置する。

5. 定植後の管理

(1) トンネル栽培

- トンネル内の温度（なすの生長点付近）が30℃以上にならないように換気を行う。
- トンネルを除去する時期は、夜温が10℃を確保できるようになる頃が目安となるが、天候が不順な時期でもあることから5月中旬頃までは被覆しておくことが必要。
- トンネルを除去するにあたっては、換気量を増やしたり、除去直前には夜間もトンネルを開放するようにして、徐々に外気に慣らすようにする。

(2) かん水

- 活着までは、土壌の乾きに応じて、株元に少量のかん水を2～3回程度行う。
- かん水チューブを設置した場合、活着後は定期的に行い、1回のかん水量は少なくする。
→ 手かん水からチューブかん水に切り替え、暖かい日の午前中に行う。

(3) 活着遅れや草勢が弱い場合

- 乾燥具合を見ながら、株元に再度かん水する。
- 発根促進剤や酸素供給剤を活用して、発根を促す。
- 株の生育に応じて、1番花を除去し、初期生育を促進する。
- 葉面散布(窒素入り)を5～7日おきに、2～3回行い、生育を促進する。

(4) ホルモン処理

- なすは、日最高気温が20℃以上の日が続くようになると正常に開花・結実が可能となるが、開花期に17℃以下の低温に遭うと花粉の発芽が悪くなり、着果不良になりやすい。このため、最低気温が15℃以上を確保できるようになるまでは、確実に着果させるようホルモン処理を行う。